

高齢社会をよくなる 女性の会会報

No.135 2002年4月発行

高齢社会をよくなる女性の会
東京都新宿区新宿2-9-1
第31宮庭マンション802号室
TEL.03-3356-3564
FAX.03-3355-6427
郵便振替 00100-0-79477

URL : http://www7.ocn.ne.jp/~wabas/

E-mail : wabas@eagle.ocn.ne.jp



— 目 次 —

- 3月例会・21世紀の社会保障のための勉強会15
高齢者の現代史・河畠修 1
- リレー・エッセイ⑦後藤美代子 6
- 男・老いを語る⑩猪口孝 7
- 本の自己紹介、事務局日より 8

◆ 三月例会 ◆

二〇〇二年三月十四日(木)

於・生命保険文化センター

二十一世紀の社会保障のための勉強会 15

高齢者の現代史―年表から見た年金・医療・介護―

講師・河 畠 修 (浦和短期大学教授)

司会・高見澤 たか子 (当会理事)

介護保険が導入されて丸二年、見直しに向けての動きが活発化しています。医療制度や年金問題など、高齢者をとりまく環境もまた変わろうとしています。こういう時だからこそ、過去の高齢者福祉の政策を整理し、さらに未来に向けて何が重要か考え、今わたしたちの立っている場所を確認することが大切です。

河畠先生は、一九九二年以来の当会の会員であり、前職はNHK「シルバースー」ト」という番組のディレクターでした。

ジャーナリストとして、研究者として、高齢者の政策を見てきた立場から、「高齢者の現代史」を語っていただきました。詳細は別掲の年表を参照してください。

高齢化社会の進展

日本の高齢社会の大きな特色は、高齢者比率の急伸です。一九七〇年には、七・一%、一九九四年一四・一%と、倍化年数は二十四年です。七〇年以前の大きな

制度設計としては、つぎの二つです。

一九六一年、国民年金法がスタート。

自営業にも年金制度ができ、国民皆年金となりました。

一九六三年には、老人福祉法。対象を六十五歳以上とすることとなり、それま

で六十歳以上だったり、七十歳以上だったりマチマチだった高齢者の定義にラインを引きました。年齢については国によって線引きの違うことがあるので、要注意です（上海では六十歳以上）。

この年、養護老人ホーム、軽費老人ホームについて、特別養護老人ホームが設置されましたが、日本人全体に介護への意識がなく、「特別養護」というような、特別って何だというあいまいな名称となりました。

当時の時代背景としては、一九六〇年の「家つき、カーつき、ババぬき」、一九六三年の「三チャン農業」があります。



会報はいつも熱心に読んでいますと、河島先生

年表から見た年金

五万円年金

一九七三年、当時の田中角栄首相が「福祉元年」と名づけて、夫婦で五万円の年金を形の上で実現し、公務員の初任給五・五六万円に近づけました。

二〇〇〇年の厚生年金の平均受給額は一七・六万円であり、公務員初任給一八・四万円との差は僅少、当時の五万円年金はその意味でも評価できます。

七〇年以降、高度成長が進んでサラリーマンが増え、八二年には、高齢者の所得の第一位が年金、稼働所得が二位となりました。現代にあっても年金は高齢者の所得のトップにあり、高齢者にとって大切な柱となっています。

六十歳定年と年金

八〇年代には、大企業を中心に定年延長が行われ、「六十歳定年」が定着しました。八五年には、女性の平均寿命が八十歳を超え、「人生八十年時代がきた」といわれました。直近の平均寿命は女性八四・六歳、男性は七七・六歳です。

九〇年代に入って、九三年の年金制度改正によって、〇一年より順次六十五歳支給となっています。二〇〇〇年に入って、年金保険料を支払わない、支払えない「年金の空洞化」が進んでいます。

年金の当面の問題としては「女性の年金」です。方向としては三号被保険者をなくして、「年金の個人化」を目指す時代です。自営業は夫も妻も一人ずつ支払っています。

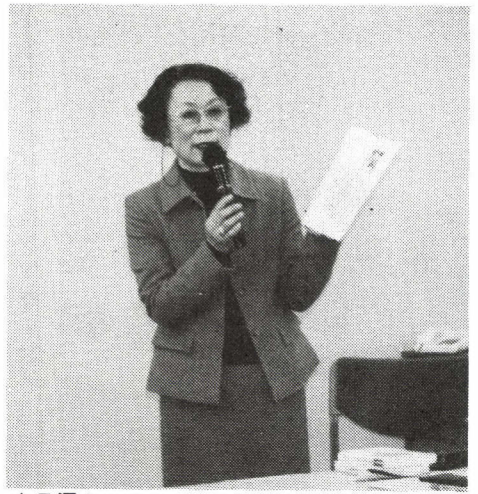
年表から見た医療

介護無策時代

歴史的に見て、「医療が介護を包んできた」状態が長く続き、医療から介護が産み落とされて、介護が確立してきました。

七〇年代は老人医療の無料化が大きなテーマでした。老人病院が急増し、岡本祐三さんのいう「闇の病院」が生まれ、さらに精神病院では、安岡章太郎「海辺の光景」（一九五九年）に描かれている通りの、悲惨な状況がありました。

その背景には介護施設がないこと、病气と介護を混同し、医師に託すのが一番



高見澤さんのたくみな司会で始まりました

いいという素朴な医療信仰、じつと寝ているのがいいというリハビリ思想の不在。介護無策の時代が長く続きました。

動き出した政策

八〇年代に入っているいろいろな政策が出ました。八二年の「老人保健法」による、「四十歳以上住民の健診の義務付け」は、大きな意義のあることでした。八三年には、「特例許可老人病院制度」が設けられました。老人医療費の増加は高齢者人口の増加を超えるものでした。

その理由としては、①検査技術の向上、②薬の多用（複数の医師からの複数の薬を飲む）、③薬価差益が病院収入として組

み込まれているなど。

九〇年になって、定額払い方式が導入され、介護力強化病院など、介護を中心にして、慢性的な病気に対応しているという体制ができました。

九二年には、療養型病床群の制度ができ、医療から介護を離しているという政府の意図が見えてきました。「cureからcareへ」の流れであり、社会的入院の解消を目指す動きです。

二〇〇〇年には、介護保険が導入され、〇三年に療養型病床群は、介護療養型医療施設に吸収されていきます。

医療・介護施設において、今大きな問題になっているのは、「拘束」です。拘束は病院の中にあつては治療の一環、犯罪とは意識されていません。九八年に、「拘束禁止福岡宣言」が出され、全国に広げようとしているけれど、まだモラルの領域を出ていないのが今後の課題です。

特養ホームに就職した学生が拘束問題に悩み、「こういうところで働くのはつらい」といってきます。話を聞いてみると、理想と現実の中で現場は苦勞しています

が、夜勤の人員配置も問題です。

〇二年には、「高齢者医療制度の創設」が課題になっていますが、これまで先延ばしにされてきた「医療制度の抜本改革」には至っておらず、医療の抜本改革は今もっともさしせまった問題です。

年表から見た介護

「介護の医療化」の時代

七〇年代を振り返ってみると、在宅介護政策はほとんどなく、「介護の医療化」時代でした。ホームヘルパーの制度は、五六年に長野県で初めて実施され、六二年には東京都にも家庭奉仕員の制度ができましたが、在宅介護の認識は低く、とくに痴呆性高齢者の問題の認識がありませんでした。

そういう中で、危機感を持った人々が市民運動を始め、八〇年「呆け老人をかえる家族の会」、八三年「高齢（化）社会をよくする女性の会」がうまれました。老人保健施設スタート

八六年には、「家庭と病院の中間」「介護と医療の中間」を目指す、老人保健施設

設がスタートし、兵庫県に第一号が誕生して以来、順調に地域に定着しています。

この頃から、特養ホームの個室化が始まりました。八八年、保谷市の東京老人ホームの日高登先生が始めた頃は、旧・厚生省の理解を得るのが大変でしたが、今は全個室の特養ホームも出現し、厚生労働省も将来の特養ホーム個室化に向けて検討会を開いています。

在宅介護と施設介護がボーダレスに

ゴールドプランがスタートしたのは、九〇年、九五年には新ゴールドプランがスタートしました。不況の中でも予算を減じなかったのは評価できるにしろ、現在進行形のゴールドプラン21では民間活



会場からは質問がたくさん

力を期待しており、公的な責任が若干後退しています。

九三年には、介護福祉学会が設立され、介護を客観的に整理し、科学的に数量化しようとする研究が始まりました。

今、在宅介護と施設介護はボーダレスになってきています。

二十一世紀に予想される現象

二〇一二年から一四年にかけて、一千万人と予測される団塊の世代が六十五歳以上に繰り込まれていきます。しかし、この世代が高齢者になる時は、人口減少と高齢者人口の激増、とりわけ後期高齢者の人口が増加する時代です。

こうした状況の中で、家族はいっそう変容し、その中でも個人化の波が早く高く押し寄せるでしょう。①年金の個人化、②選択的夫婦別姓の制度、③高齢の親と子どもの別居、④生涯学習の機会が増え、個人の嗜好も多様化。老人ホームでもわがままな老人が増える中で、「脱マニユアル」の対応が迫られています。

その一方で、緊縮財政はすすみ高齢者



最後にテスト?いえアンケートに答えました

関係のコストは増大します。望みは少ないが消費税の値上げもあるかもしれない、その場合は何にどう使われているのか、情報公開を求めていく必要があります。

今後、シルバー産業は増大し、福祉倫理とのバランスをどこに求めるのか、市民活動やNPOの活発化により「介護の質を監視」していくことが重要です。

きめの細かなネットワークにより、介護に携わっている人々が声をあげること、そういう時の力が社会の底力というものです。その意味でも「高齢社会をよくする女性の会」の役割は、非常に大きいものがあると思います。

(沖藤 典子・記)

高齢者の現代史

1 高齢化社会の進展

1970年→7.1% 80年→9.1% 90年→12.0% 00年→17.3%

以前の大きな制度設計

1961年 国民皆年金・国民皆保険スタート 介護制度は無し

1963年 老人福祉法 対象は65歳以上 特別養護老人ホーム設置

2. 年表から見た年金

70年代 73年 福祉元年 夫婦で5万円 公務員初任給5.56万円

80年代 82年 高齢者で年金所得第1位 第2位は稼働所得
60歳定年定着

☆85年に人生80年に

90年代 93年 年金制度改正→01年より順次65歳から支給へ

☆94年高齢化率14.1%

00年代 「年金の空洞化」問題 厚生年金17.6万円 公務員初任給18.4万円

3. 年表から見た医療

70年代 73年 老人医療費無料化 70年代～80年代 老人病院増える流れ

80年代 82年 老人保健法

83年 「特例許可老人病院制度」設ける

☆老人医療費の増加

90年代 90年 定額払い方式導入→介護力強化病院

92年 療養型病床群

00年 介護保険スタート・介護療養型医療施設→「社会的入院の解消」が課題

02年 「高齢者医療制度の創設」が課題

4. 年表から見た介護

70年代 「介護の医療化」の時代 在宅介護政策ほとんど無し

80年代 80年 「呆け老人をかかえる家族の会」発足

83年 「高齢化社会をよくする女性の会」発足

86年 老人保健施設スタート

87年 介護福祉士国家資格となる

☆特養ホーム個室化の動き

90年代 90年 「ゴールドプラン」スタート 95年「新ゴールドプラン」

93年 介護福祉学会設立

00年代 00年 介護保険制度スタート

後 藤 美代子

俄か障害者の 実感

この年末年始、私は二カ月間の「俄か障害者」だった。走って転び、右膝を骨折、簡易ギプスというのだろうか、上と下から添え木をあて包帯で固定して松葉杖をつくことになった。

年をとったら急いではいけない、走らない、荷物を持って両手を塞いではないけないなど、言われていることを全てやって転んだのである。

みんな私が悪いのだが、疲れないよう、滑ったりしないよう踵の低いゴム底の靴にしたのが仇となり、駅のホームにある視覚障害者用の黄色い凸凹のラインに突っかかったのだ。



でも、松葉杖なら歩けると思ったのは甘かった。体重を両手で支えるわけだから、年と共に衰えた上半身、特に両手の負担が大きく、忽ち手の平が痛くなった。十歩行くのもやつとという有様。

最近はこの駅もエレベーターやエスカレーターの設定工事をしているけれど、使う身となるとまだまだ不足。例えば、足が悪いと上りより下りの方が辛いのだが、上りのエスカレーターしか無い所が多い。エレベーターがある、と思うと、ずっと遠くだったりする。しかもエレベーターは大半、ホームと改札階の間にあって、地下鉄なら外へ出るまでは、また階

段である。乗りかえが出来る駅も、歩きは長いし、エスカレーターの無い所が多い。障害のある人の不便さを改めて実感した。外へ出る時ばかりではない。松葉杖で両手が塞がると家事はすべて出来なくなった。正月前の忙しい時期、何も出せず人に迷惑をかけるばかりの自分に落ち込み、うつ状態で寝たり起きたりしていた日もあった。これではいけないと外へ出るようにしたのが回復の時期を早めたのかもしれない。

外に出たら近所の人や商店街の人が話しかけ、励ましてくれた。だんだん気持ち楽になり、元気を取り戻すことが出来たようだ。

もし骨折が十年位あつたら、寝ている方が楽だと、その状態に甘えてしまつて寝たきりになるかもしれないと思つて、少々怖くなったのである。

プロフィール

徳島文理大学教授。NHKで定年まで三十五年勤めた後、フリーアナウンサーとして仕事を続け、今年は五十年になる。

(今回は交渉中です)



高齢社会の人生観

いのぐち たかし
猪口 孝

(東京大学東洋文化研究所教授)

1944年新潟生まれ。東京大学卒業、政治学博士。上智大学助教授、東京大学助教授を経て、東京大学教授。元国連大学上級副学長。法制審議会委員。著書に『現代日本政治の基層』(NTT出版)、『政治学事典』(弘文堂)、『米国による民主主義の推進』(オックスフォード大学出版社)など。

人間の寿命は栄養や衛生の向上とともに、着実に伸長しました。実際、一昔前には人生五〇年だったのですから驚きです。高齢社会の出現は昔から古典とされる社会政治哲学にも一部変更を要求しています。

たとえば、一六世紀の英国思想家のトマス・ホブブスは聞き捨てならない言葉を吐いています。「人の一生は意地悪で、残酷で、そして短い」というのです。なんとなく尤もらしいのですが、論理的には内部矛盾があります。

人の一生が本当に意地悪で、残酷だったら、「…そして長い」というべきなのです。なぜならば、短いとしたら、折角の二つの前の形容詞が台無しです。人生は長いということで、本質的に意地悪で、残酷な人生が一層意地悪で、残酷なものになるのです。人生が本当に意地悪なことばかりで、残酷なことにみちみちていたらとすれば、それは長いとしなければなりません。なぜ、ホブブスがこのよ

うな論理的に少し甘いことになったのでしょうか。それは高齢社会になっていなかったからです。一六世紀の欧州は地球寒冷化がかなり進んだ時期でした。そのため、穀物中心の食事をしてきた欧州の多くの社会で人口が停滞しました。英国では魚を食べる習慣がそのころまでについたために、フランスほど人口が低減しませんでした。一般に人生はむしろ短くなったのです。それは辛いことでした。ホブブスの気持ちもそうでした。

二一世紀初頭の今日、改訂版をつくるとすれば、「人の一生は、そう意地悪でも、そう残酷でもないが、とにかく長く、そしてさみしい」となるのではないでしょう。日本の高齢社会は肉ではなく、魚を食べる習慣によっても可能になったのだとすれば、一六世紀英国ではやはり魚を食べる習慣によって、人生がもっと長ければ、意地悪で、残酷なことも克服できるのではないかとホブブスをして思わせたところが面白いですね。

猪口邦子上智大学教授(猪口孝氏夫人)は、この度民間から国連軍縮大使(在ジュネーブ)に任命されました。心からお祝いし一層のご活躍をお祈りします。

「高齢者介護と自立支援」

大森彌編著

(ミネルヴァ書房刊 二二〇〇円＋税)

介護保険制度において「介護の社会化」がうたわれ、介護者の負担軽減のための介護サービス利用が活発化しつつある。また、制度設計の中で「地方自治」についても十分な配慮がなされたため、本制度が「地方自治の試金石」とまで評価を受けている。

しかし、特別養護老人ホームへの入所を中心としたサービス利用の選択については、要介護者の意思が軽視されているなど、自立支援という理念が全く浸透しておらず、地方自治についてもまた、国の通達通りに振り回されている市町村が数多くある。

制度施行後、介護保険制度のめざした「自立と自治」の理念を再確認するため本書は、大津市で開催されたシンポジウムの内容を掲載すると共に、シンポジストから制度の理念や可能性について書いてもらい、高齢者介護と自治に関心のある人に、質の高い議論を提供する一冊。

巻末に大津市の積極的な取り組みを紹介！

「高齢者の現代史」

河島修著

(明石書店刊 二一〇〇円＋税)

一九七〇年に日本が高齢化社会となつて三〇年余り。現代史の中で、高齢者の足音は次第に高く、強くひびいて来た。その活動は点から扇状に、各分野にひろがっている。こうした動向を時系列に沿つてまとめているのが本書である。

年金・介護・医療の各分野にとどまらない。高齢者の暮らしや生きがいが、社会の移り変わりとともにどう拡大して来たのか、十年ごとに区切りをつけ、さまざまな事実を引き合いに出してたどっている。高齢化率が上昇するにつれ、高齢世代の比重は増していく。しかし、この世代をとりまく動きを追った本は、本書以外に見当たらない。サービスや教育の現場で日々の対応に追われている人にとって、ちょっと足を止め、後ろをふり返り、前を眺めるために恰好な本となっている。巻末にそえられた七〇年から二〇〇一年に到るまでの高齢者関連の年表も便利である。「歴史とは記憶の共有化である」

事務局だより

新年度のスタートです。お元気ですか。

第二回・高齢化に関する世界会議(4/5)4/9、スペイン)のNGOフォーラムには、代表はじめ十数人の会員が参加し、急きょ現地でワークショップを持ち有意義な活動ができたそうです。「ARRP」(米国)「OWN」(欧州)からは事前要請があり代表が発言していますが、これらの英文原稿は近々ホームページに掲載予定です。

★今回は、会報、五月例会チラシ、総会案内、出欠ハガキ、会費振込用紙(前納)して下さった方を除く)を入れました。ご確認ください。

★五月例会は広い会場です。お友達をたくさん誘って賑やかにご参加ください。

★総会には遠くからご参加の方も多いため、早めのご案内です。必ずハガキ返信を。

★介護保険見直しへのご意見は引き続き募集中。メールは五三届届き大感激です。

★オーブンハウスは五月二十七日(月)十一時～四時までです。(長井照子)